



# OVERSEAS

## Brazil —ブラジル—

### 海外事情【寄稿】



## サンタ・カタリーナ州での滞在経験



**福渡 淳一** FUKUWATARI Junichi  
日本工営株式会社  
環境事業部/水環境エネルギー部/課長



**加藤 佑介** KATO Yusuke  
日本工営株式会社  
環境事業部/水環境エネルギー部/技師

#### イタジャイ川とフロリアノポリス

成田空港を昼過ぎに出て、アトランタとサンパウロを経由して約36時間後、ブラジルはフロリアノポリスの空港に到着する。往復に費やす日数は時差の関係もあり5日間ととても長く、日本との時差はちょうど12時間、昼夜が真逆だ。文字通り“地球の裏側”の国である。

我々は、ブラジル南部のサンタ・カタリーナ州に位置するイタジャイ川流域の防災計画に携わった。流域面積は約15,000km<sup>2</sup>、関東の利根川と同規模である。流域人口は約110万人。イタジャイ市、ブル

メナウ市が流域内の主要都市である。今回の業務は、治水対策と土砂災害対策のマスタープラン作成とフィジビリティスタディの準備調査であった。調査自体は2010年3月～2011年11月までの21ヶ月間に渡るものであったが、我々が現場に滞在したのは延べ約9ヶ月である。

我々の調査団は、事務所をサンタ・カタリーナ州の州都であるフロリアノポリス市内に構えた。フロリアノポリス市はイタジャイ川の流域都市ではなく、サンタ・カタリーナ島内にある大都市である。島の規模

は種子島と同程度の約440km<sup>2</sup>とさほど広くはないが、都市人口は約40万人と州内で2番目に多い。1番目はジョインヴィレ市で約50万人。南アメリカ大陸とは全長約800mの橋で結ばれおり、プロジェクト現場のイタジャイ市へは車で2時間程度、ブルメナウ市へは3時間程度の位置関係である。

大西洋に面しているこの島は、夏は暑く冬は寒いという日本に似た気候で、四季を感じることができる。東京と比べると、夏は気持ちのよい風が吹くためカラッとしていて、とても過ごしやすい。冬は



写真3 事務所近くのボル・キロの約500円昼食



写真4 大きくて美味しい牡蠣



写真5 カラフルなお寿司

雪が降るほど寒くはないが、暖房器具が充実している施設が少ないため、体感的にはとても寒く感じる。

ブラジルはサイクロンに見舞われることもなく、地震の心配もない。事務所のあるフロリアノポリス市内でも、これまでに大きな災害は起こってはいないが、プロジェクトサイトのイタジャイ川流域は、川の勾配が緩やかなため、豪雨が連続と上流側は浸水しやすい。また治山整備も進んでいないため、土砂災害も発生しやすい。

#### 都市情報

フロリアノポリス市は、中心街(セントロ)を基点として都市が形成されているが、開発はあまり進んでいない。商店街は大型のスーパーマーケットというよりはむしろ通りに様々な店舗が軒をつらねているというかこうだ。道路の整備は充実しており、移動手段は車かバスである。バスの移動は金額もわかりやすく、時間通りに来るので便利であった。

ビーチもバスですぐ行くことができ、初めて大西洋を見たときには波の迫りに圧倒された。護岸や消波ブロックのない自然そのままの海岸を日本で見かけることが少ないので、とても綺麗で印象的だった。波の高い季節にはサーフィンの国際大会も開催される場所

とのことである。休暇時期には、国内をはじめアルゼンチンやウルグアイなどの海外からも観光客が多く訪れる。レストランやホテルなどのリゾート施設が充実しており、観光業が盛んな都市である。

イタジャイ川流域にあるブルメナウ市は、ドイツ系の移民が多く住んでおり、街並みもドイツ風である。産業は観光業や繊維業が中心である。川沿いにあるため、過去の洪水では浸水被害が発生しており、2008年の洪水とそれに伴う土砂災害で、周辺の都市を含め100人近い死者を出している。

#### 食事と飲み物

ブラジルで我々が食べていた一般的な昼食は、ボル・キロというバイキングである。皿にフードコーナーから食べ物を乗せ、重さに対する単価が掛け合わされて精算する。量り売りのようなシステムであるが、野菜、肉、米と種類ごとに単価が設定されており、単に重さだけで値段が決まるのである。生野菜が10種類程度、肉や魚を調理したものが5種類程度、そこに米やパスタなどの主食があるのが一般的である。調理方法も毎日少しずつ変化があるので飽きることがなく、値段も良心的なので昼食は毎日同じボル・キロへ通っていた。

日本で良く知られているブラジ

ル料理と言え、シュラスコ(ブラジル・ポルトガル語ではシュハスコ)である。テーブルに座っていると串刺しになった肉を持った従業員が来て、切り分けてくれる。目の前で大きなナイフを扱う様子は慣れないうちは怖かったと記憶している。また、海に囲まれたサンタ・カタリーナ島は、牡蠣をはじめとする魚介類の産地でもある。特に牡蠣やサバなどは日本のものより美味いくらいである。市内には日本食を扱うレストランも多い。寿司や刺身は、種類は少ないがカラフルな盛りつけで楽しむことができ、食事には困らなかった。

飲み物はコーヒーとカシャーサが印象的である。コーヒーは世界一の生産高を誇るだけあり、生活の一部に溶け込んでおり、皆さんよくコーヒーを飲む。多くのショッピングセンターやレストランの入り口にポットが置いてあり、誰でも無料でコーヒーを飲むことができた。またコーヒーが飲める店(バー)も多くあり、ほとんどの店でエスプレッソが堪能できる。ただし、コーヒー豆を販売している専門店はなく、スーパーでしか購入できなかった。コーヒーは家の外で飲むものであり、家庭ではあまり飲まないのかもしれない。

ブラジルのお酒で有名なカシャーサは、サトウキビを原料とする蒸留酒である。アルコール度数が高



写真1 プロジェクトの調査団とカウンターパート



写真2 夏場は多くの観光客が来て賑わうビーチ





写真6 地元スタジアムでのAVAIの試合



写真7 カウンターパートと肉じゃがやカレーの食事会

いので、砂糖、ライム、氷を入れたカイピリーニャで飲む。手軽にできる飲み物で、パーティなどでは大きなグラスに作り、皆でシェアするのが一般的である。また、ブラジルはビールも美味しく、とても安い。スコルやバヴァリアなどといった銘柄の350ml缶が100円程度で売られている。

### 経済格差と治安問題

ブラジルと言えば治安の悪さで有名である。実際にサンパウロ、リオデジャネイロ、サルヴァドルといった大都市のスラム(ファヴェーラ)に入ると生きて帰るのが難しいといった話を良く聞いた。特にリオの犯罪集団は警察を上回る武装をしており、ワールドカップやオリンピックに向けて軍が秩序回復に当たっているほどである。ブラジルはBRICsの一つに数えられ、目覚ましい経済発展を遂げているが、貧富の差が大きく、スラムでは麻薬に関わる犯罪が多発している。

ガイドブックなどには「重度の注意が必要で、お金は財布に入れないで分散して持ち、時計も財布も全て部屋に置いていくべき」などと書いてあり、我々もブラジル

へ到着した当初からかなり注意を払っていたが、フロリアノポリス市内の治安はとて良く、親切な人が多かった。道に迷えば教えてくれるし、言葉が通じないときは英語を話せる人を探し出してくれ、なんとか会話を成立させることができた。

こんなエピソードもある。ある日コーヒーショップに忘れ物をしてしまった。その後、別の場所で偶然出会ったコーヒーショップの店員に、荷物を預かっているから取りに行くように告げられた。ブラジル人の優しさを感じた。また、ホテルの従業員もチップを受け取る習慣がなく、枕元にチップを置いても持って行くことはなかった。それでも調査で貧しい地域に入るときは、同じブラジル人でもかなり緊張し、注意が必要なことには変わらない。

### 娯楽

ブラジルと言えばサッカーである。サッカーは毎晩のようにテレビ中継されていた。レストランでもサッカーの試合を放映しており、客がビールを飲みながら観戦している。これが多くの男性の娯楽のようだ。フロリアノポリス市を本拠地

とするAVAIというサッカーチームは、ブラジルの1部リーグで活躍している。毎年、良くも悪しくも健闘しているチームであり、優勝争いにもつれ込むこともないが、降格圏内に入ることもまずない。サッカースタジアムは空港近くにあり、試合がある主に水曜と土曜は、道路が混雑して渋滞となる。また、AVAIが勝てば夜中まで若者が大騒ぎすることもある。

渡航前は老若男女がサッカーを愛していると思っていたが、子供たちが普段サッカーをしている姿はあまり見られなく、女性がバーなどでサッカー中継を食い入るように観戦していることも少なかった。女性はというと、友達を自宅に招き一緒に料理して酒を飲むといったインドア派が多かったように感じる。カイピリーニャなどを飲みながら、週末の昼ごろから夕方まで、おしゃべりと食事を楽しむのである。また健康ブームに沸き、多くの市民が朝晩ジョギングしている姿をよく見かけた。海岸沿いに街灯付きのジョギングコースも整備されており、無料で使用できるトレーニング機器もコースに併設されている。



写真8 オクトバー・フェスタのパレード



写真9 オクトバー・フェスタのダンスホール



写真10 日系人会の会合

### フェスティバル

毎年、フロリアノポリス市のフェナ・デ・オストラ(牡蠣祭り)やブルメナウ市のオクトバー・フェスタといったフェスティバルが開催される。

フェナ・デ・オストラは、牡蠣のシーズンである11月ごろにセントロ近くの大きな会場で開催される。生牡蠣からグラタン風に焼いたものやパエリア風など、様々な食べ方で牡蠣を堪能することができる。

オクトバー・フェスタは、イタジャイ川の氾濫で多大な被害を受けた町を復興するために、ドイツ系移民が母国のビール祭りに倣って始めたものである。10月末から11月にかけて約3週間にもわたって開催される。毎日パレードが行われ、週末にもなる動けないぐらい人が集まる。この間、大人たちはジョッキ片手にビールを存分に楽しむのである。

また、フェスティバルには歌と踊りがつきもので、大きな会場でバンドの生演奏に合わせて踊る。南米の陽気さなのか、その場で知らない人と仲良くなれるのもフェスティバルの醍醐味だ。

### 日本との関係

街中では日本食レストランを多く見かけるものの、日本人や日系人に会うことは少なかった。ただ日系のコミュニティがあり、200

名近い人たちの交流があった。日系人会といった集まりも2ヶ月に1回程度あり、何度か参加したことがある。フロリアノポリス市近郊に住んでいる人が50人程度集まり、一緒にカレーや焼きそばなどの日本食を作り親交を深めた。この日本人会には和太鼓のチームがあり、定期的に大きな会場で公演しているようだ。

サンタ・カタリーナ州は青森県と友好関係を結んで、約30年前から交流が続けられている。青森県からりんご栽培技師が派遣されており、技術提供を受けている。日本で食べられているブラジル産の鶏肉は、このサンタ・カタリーナ州のイタジャイ港から輸出されている。

全体として、ブラジル人は親日的かつ友好的である。JICAプログラムで政府関係者が日本へ来ることもある。今回従事したプロジェクトが終わる段階でも、サンタ・カタリーナ州の政府関係者が来日し、日本に対する期待が高いと感じた。

### ブラジル・ポルトガル語

初めて訪問した際、行きの飛行機で隣に座った乗客が「フロリアノポリスは英語が通じる」と言っていたのだが、実際に英語を使う人はあまりいない。ブラジルでは学校で英語を学ぶものの、英語で話す機会が少なく、就学者でもあまり

英語を話さないとのことだ。生活をしていく中で、ポルトガル語を学びたくなり、週末を利用してセントロにあるポルトガル語教室へ通った。ラテン語系の言語を学ぶのは初めてで、動詞の活用の多さや女性名詞、男性名詞の区別などに戸惑いはあったが、楽しく学んだことが懐かしい。

ポルトガル語はスペイン語、イタリア語、フランス語と同じロマンス語に分類される言語である。特にスペイン語とは方言程度の違いしかないと言われ、両話者の意思疎通は十分可能である。スペイン語話者の話すポルトガル語、ポルトガル語話者の話すスペイン語は、冗談半分にポルトニョールと言われている。

### 結語

広大な国土を持つブラジルだが、今回お世話になった都市は気候もよく、治安もよく、何より人が温かく、よい経験ができた。ブラジルは地域によって貧富の差が大きく、特に北部は貧困層が多く治安も悪いと聞く。ただ南部のフロリアノポリス市は、比較的裕福な人が多くとても住みやすい。実際、ブラジル国内でも人気のある都市の一つである。いつの日か、またフロリアノポリスを訪問して、牡蠣とビールを楽しみたいものである。